

『就実大学大学院教育学研究科紀要 2020（第5号）』 抜刷

就実大学大学院教育学研究科 2020年3月10日 発行

# 1950年代生活指導に立脚した道徳指導の試み

—神戸市『私たちの中学生生活』を手がかりに—

**An Experiment of Moral Training based of Lifestyle Guidance  
in The 1950'S in Relation to "OUR JUNIOR HIGH SCHOOL LIFE"  
Issued by KOBE City**

渡 邊 言 美

# 1950年代生活指導に立脚した道徳指導の試み —神戸市『私たちの中学生生活』を手がかりに—

渡邊言美

An Experiment of Moral Training based of Lifestyle Guidance  
in The 1950'S in Relation to "OUR JUNIOR HIGH SCHOOL LIFE"  
Issued by KOBE City

Kotomi WATANABE

## 抄録

1950年代、神戸市では教員の研究組織によって編集された教材『私たちの中学生生活』が刊行され、3度にわたって改訂された。1958（昭和33）年学習指導要領改訂によって「道徳の時間」が特設された前後の時期にわたって刊行されており、全面道徳の時代と特設道徳導入後の生活指導に即した道徳教育の教材の変化を分析する事のできる貴重な素材であるとする。本稿では特に初版に注目し、全面主義道徳教育のもとで地域や生徒の生活実態に即した道徳教育の自主的実践についてその一端を明らかにした。本教材は主としてホームルームでの使用が企図されたものであったが、現行の学習指導要領における「特別の教科 道徳」の指導理念につながる性格を持つことが判明した。

キーワード 道徳教育 生活指導 生徒指導 中学生生活

## はじめに

「生活指導」とは、山本敏郎他（2014）によると「子どもを生活者としてとらえ、社会的実践主体に育てる教育実践」である<sup>1</sup>。生活指導を通じた道徳教育に意義を見だし、その推進や深化を図ろうとする方向は、かつて大きく2つの時期において強く主張されてきたように思われる。第1に、戦前期、いわゆる大正新教育運動の担い手達により、私立学校や師範学校附属学校等での「生活修身教育」論が展開され、実践されていた時期である。第2に、戦後昭和30年代、特設道徳をめぐる議論の中での主張である。奥平康熙は、教育学界や民間教育諸団体は特設道徳を批判し「対抗する道徳教育実践と理論をつくりあげようとした」と評価し、地域共同体による規範形成・教育の意義を主張している<sup>2</sup>。

本稿は、神戸市における戦後生活指導立脚型の道徳教育の模索を示す事例をもとに、地域や児童生徒の実態に即した道徳指導の在り方について検討することを目的とする。特に本稿では、『私たちの中学生生活』初版内容と、その改訂経緯を中心に論じる。

## 1 先行研究

第1の時期に於ける生活修身教育の理念と実践について、これまで岩瀬六郎の著作や実践に着目した研究をはじめ、多くの研究がなされている<sup>3</sup>。しかし地域に特化した生活修身教材の作製および実践に関する研究は少ない。筆者は神戸市教育課編刊『生活指導の修身教育 実際篇』および、同月に刊行された『生活指導の修身教育 教授細目篇 尋常科之篇』の分析を通し、尋常科部分を中心に神戸市という地域の特殊性を生かした生活指導的観点からの修身教育観について論じた<sup>4</sup>。また『生活指導の修身教育 教授細目篇 高等科之篇』の分析を行い、青年の不良化防止の意図が反映されていること、社会階層に適合した道德理念の定着が企図されていたことを指摘した<sup>5</sup>。

第2の時期については、まず戦後の「全面主義道德」から「特設主義道德」への転換をめぐって戦わされた論争については多数の研究蓄積があるが、ここでは最新の修占新の整理を紹介する<sup>6</sup>。修によると特設「道德」設置への反対理由としては(1)修身科の弊害(2)全面主義道德教育への賛同の2点があった。また修は(2)の立場からの生活指導の重要性についての主張として、海後勝雄、梅根悟、今井誉次郎、宮坂哲文、正木正らの主張を紹介している<sup>7</sup>。海後・今井の主張は「道德は教えるものではなく、知識の伝授、知識の取得の過程で、自然に身につけていくものである」というものであり、全面主義道德教育の代表的意見であった。梅根は特に、社会科と生活指導という二本の柱によって支えられており、双方が相補的な関係にあると主張したとする<sup>8</sup>。

奥平は、戦後道德教育は「個人の自由と開放」「新しい社会・国家の一員として、その秩序の担い手へと形成する」という二つの基本的課題に答えなければならなかった」と指摘し、1950年代の道德教育の理論と実践の試みは「国家・国民の共同性という枠を道德教育の規定の前提にするのでもなく、そうした共同性が道德性形成に対して持つ意味を無視するのでもなく、日本の道德的規範意識形成の状態を明らかにし、その現実を踏まえて、道德教育の理論と実践を構築しよう」とするものであると位置づけた<sup>9</sup>。小林万里子は「『道德の時間』成立直後の授業の多くは、生活指導的な発想のもとで行われていた」として、宮田丈夫の分類を紹介している<sup>10</sup>。

他に「生活指導」の特質を生かした個別市町村や各学校の実践を取り上げた研究がある。梶井一暁(2015)による徳島県鳴門市里浦小学校での1953-1955年の実践を取り上げた事例研究がある。梶井は、里浦小学校教師は「教育即道德教育」の理念を求め、実践を模索し、単純な全面主義道德教育か特設主義道德教育かという択一的な状況を抜け出し、「地域のなかの学校」という視角から、道德教育のあり方を捉える立場を得るにいたったと指摘した<sup>11</sup>。

志村廣明(2006)は、安城市立高棚中学校所蔵資料を用いた、1958年以降の「道德の時間」の実践研究の事例を紹介している<sup>12</sup>。志村は、同校の取り組みは「それまで続けてきた『生活指導』の実践に立脚したものであり、あくまで子どもたちの生活のなかから生まれる課題をベースとした道德指導が展開されていた店に特色があった」と結論づけた。

橋本雅子ら（2017）は、1960年代の京都中学校での「生活課程」という道德実践を取り上げ、宮坂哲文が主張した「集団づくり」論が理論的背景として意識されていること、「生活課程」では「生活指導の場に立つ道德時間」を標榜した道德の取り組みが行われたが、宮坂の設定した3つの型のうち、第2/3の型を合わせた形式をとっていることを指摘した<sup>13</sup>。

しかし上記のいずれも主として1958年特設道德の導入前、または導入後の実践であり、戦後「全面主義道德」観の時期から特設道德導入後までを通じての活動に注目した研究ではない。本研究でとりあげた「私たちの中学生生活」は1952（昭和27）年から少なくとも1959（昭和34）年まで改訂刊行されており、全面道德の時代と特設道德導入後の生活指導に即した道德教育の教材の変化を分析する事のできる貴重な素材であると考えられる。

また神戸市の自治体史、教育史関連の先行研究においても、「私たちの中学生生活」やそれに関連する文書を用いた研究は見当たらない。

## 2 1950年代における「生活指導」「生徒指導」と道德教育

「生活指導」という用語は大正期に初めて使われており、1946（昭和21）年に公式用語として文部省が初めて用いていたが、1965（昭和40）年の「生徒指導の手引き」以降は「生徒指導」の呼称が使用されて「生活指導」は行政刊行物では使われなくなった。2010（平成22）年刊行の『生徒指導提要』においても、「『生活指導』は多義的に使われていることや、小学校段階から高等学校段階までの体系的な指導の観点、用語を統一した方がわかりやすいという観点から」「生徒指導」としていると記載されている<sup>14</sup>。

山本らは戦後の4つの生活指導論のうち、1965年以降の「生徒指導」は①日常生活の仕方や態度の指導 ②ガイダンス理論に依拠して子どもたちの適応を図ろうとする考え方の系譜を引き継いで、規律の維持と規範意識の醸成を図ろうとしていると指摘し、一方で③生活綴方、それをもとにした仲間作り、④自治集団として組織する仲間作り、の系譜に位置づけられる生活指導実践も脈々と受け継がれているとする<sup>15</sup>。松下一世（2012）は、「生徒指導」という名称の導入は「それまでの「多様な」生活指導のひとつに見られた社会主義的民主主義や社会変革をめざすものを排除した」ためであるという<sup>16</sup>。一方で早坂淳は、「生徒指導」という用語の導入の意義として、第一に理論化が容易であること、第二にその場面を学校教育に限定することによって教師の過剰な労働の抑止が期待されることとして、「現代の学校教育の場面において適切な用語」であると評している<sup>17</sup>。このように、戦後1960年代以降「生徒指導」の名は公定用語として使用され続けている一方で、その方向に異を唱え、「生活指導」は「管理主義の代名詞と誤解されてきた」<sup>18</sup>が、「子どもの自主性を尊重し、子どもの社会的な自立を支援する営み」として捉え、積極的に用いる立場がある<sup>19</sup>といえよう。

石田美清（2005）の整理によれば、「生徒指導」「生活指導」の概念は以下のような変遷をたどった<sup>20</sup>。

- ・昭和20年代前半の「生徒指導」：ガイダンスと同義。問題行動対策は社会教育
- ・昭和20年代後半以降の「生活指導」：就学及び不良防止
- ・昭和30年代の「特別教育活動（教科以外の活動を通じた生活指導の強化）」：問題行動対策

その後昭和30年代後半に中学生による集団少年非行の増加とともに、学校に道德教育と「生徒指導」による対策が求められるようになったという。

本研究が対象とする1953年～1959年は、石田の整理によれば「生活指導」と「特別教育活動」の時期にあたり、学校での問題行動対策が行われるようになった時期と言える。

### 3 『私たちの中学生活』初版の内容と特徴

本研究で用いるのは神戸市校長会『私たちの中学生活』初版、および神戸市立中学校生活指導研修部編刊、神戸市立中学校校長会発行（1959）『わたしたちの中学生活指導資料書全学年用』改訂第一版、神戸市立中学校道德教育研究委員会『神戸市立中学校道德教育実施要項案』である。

#### (1) 刊行状況

まず『私たちの中学生活』の刊行状況である。筆者が可能な限り把握し、一覧表にしたものが表1である。「有」は所在を確認することができた文献である。初版は1冊であるが1954（昭和29）年改訂版以降は、3学年の分冊となっている。表の記載情報は、1959（昭和34）年4月刊行、神戸市立中学校生活指導研修部『わたしたちの中学生活 指導資料書』の記載を典拠とし、全国の図書館等での所蔵状況を調べて追加した。

表1 『私たちの中学生活』の刊行状況（筆者作成）

	年月	編集	タイトル	刊行	版	巻	所蔵確認有無	所蔵
1	1953.4	神戸市立中学校生活指導研修部	私たちの中学生活	神戸市立中学校校長会	初版	1巻	有	京都大学図書館
2	1954.4		私たちの中学生活		改訂第1版	1巻-3巻	有	京都教育大学附属図書館
3	1957.4		私たちの中学生活		改訂第2版	1巻-3巻	無	
4	1959.4		わたしたちの中学生活		改訂第3版	1巻-3巻	有	京都教育大学附属図書館

#### (2) 『私たちの中学生活』初版、(1953年版)の編集経緯

編集経緯は「私たちの中学生活 7か年の歩み」によって知ることができる<sup>21</sup>。1950（昭和25）年に「神戸市中学校日常生活課程基準」が作成された。「1基準構成の立場」は、(1)「日常生活経験を通して成長していく生徒が、さらに伸びていくためには」、「日常生活

課程のもつ現実性、具体性は、系統課程のもつ理論性、抽象性によってさらに高度な豊かなものにされる」(2)「生徒たちが日常生活において営んでいる自然な生活をとりあげ、そこから望ましい習慣や、態度を形成する。しかもそれは単に教えることによってでなく、あくまで経験し、行為にうったえて実践していく中に体得するもの」とされた。「2 単元設定の手続き」は、(1)神戸市教育目標および中学校の努力目標を考慮して各学年の重点目標を設定した。

しかし1952(昭和27)年、生活指導研修部会で、市基準は「あのままでは活用されにくいものである。これを裏返しにしたような生徒用のテキストを。現場でなやんでいるわれわれの手で作成しよう。それが生活指導の隘路を打開する捷徑であるという結論に到達した」という。「①二十五年度の市基準をもととして、生徒が毎日の生活上、最も必要だと思っている問題、学校行事、季節行事として生徒が当面する問題、さらに生徒の将来を考えて指導しておく必要があると思われる問題等を選んだ。②一年生を対象とし、二、三年生も使用できるようなものとし、基準の場合と同じく、六つの指導の領域によって三十単元に整理した③この三十主題それぞれにふさわしい、読物、作文、作業、自己評価、脚本、話しあいの問題等を、A5版一二八頁に収めたもの」が初版「私たちの中学生生活」である。

### (3) 初版の内容

30項から構成されている、表2に示したのが各章ごとの内容である。全体として、中学1年生1年間の中学生生活の時系列にあわせた配列になっている。写真や図表が多用され、中学生にわかりやすく親しみやすい内容となっている。いくつか内容を紹介する。

・「21 交通道德と防火」8ページ以上にわたって記載されている。交通安全と防火について、多くのデータ読み取りと実生活での留意事項についての設問が掲載されている。「交通事故」では、以下のような設問がある<sup>22</sup>。

(イ) 君たちは今日までに、「ほんとうに命びろいをした」というようなことはなかつたか。  
自分が直接に経験しなくても、家の人や他の人人のことでそんな場合があつたら話してみよう。

(ロ) 君たちの遊びの中でこんなことは交通上、きけんであると思われることはないか。

(ハ) 君たちの中でおもしろがつて電車の線路の上に石をおいたり、自動車の後にぶらさがつたりするようなことはないか。

(ニ) 君たちの近所に適当な遊び場所はないか。

あつてもうまく遊べないというようなことだつたら、生徒会などとも連絡をとつて、うまくつかえるようにしようではないか。

「火事を防ごう」では、神戸市の火災や損害についての質問、各自の留意事項についての発問がある<sup>23</sup>。

- 1 私たちの家や学校で、火災がおこるかもわからないと思われる所はないだろうか。
- 2 その場所から火災がおきないようにするには、どのようにしたらよいか。めいめ

い考えてみよう。

- 3 君たちは、自分の家や学校に急に火災がおきた場合、どうするのが一番よいか。めいめいで順序立ててみよう。そのためにふだんから、どんな用意をしたり、練習をしておかねばならないだろうか。(昨年自分の着物に火がついてどうしてよいかわからず、あわてまわつて焼け死んだ人もあるのです。)
- 4 火事は自分だけ注意しても防げない。みんながそれに注意をしていかなければならない。みんなの人が火の用心をするようになるためには、君たちはどうしたらよいただろうか、みんなで考えてみよう。

・「28共学」では、まず男性に誘われた「良子さん」がどうするかについての考えを問う。また男女共学に関する質問が掲載されている<sup>24</sup>。

みなさんの一人一人の努力で、人間としての尊さは男も女もかわらないという考え方を、先ず此の級の中からつくつていきましょう。

- 1 此の級の男女共学はうまく行っているか。イ 一しよに勉強して女子のよい点だと思ふ所と、男子のよい点だと思ふ所を発表しよう。ロ おたがいの欠点について発表しよう。
- 2 男女の交さいについて。イ 男女のよい交わり方と、悪い交わり方について話し合おう。ロ 今後男女共学がうまくいくためにはどうしたらよいか。気のついたことを発表してみよう。
- 3 男女交際のエチケット。説話をよんで感じたことや、此の級の様子と比べて気のついたことを発表してみよう。

「アメリカの男女共学」についての文を読み、以下の設問に答える。

- 1 アメリカの男女共学の様子で日本と異なっている点はどんな所か。
- 2 この文をよんで、一番感心した所を発表してごらん。
- 3 近ごろよく言われている男女同権とはどんなことか。
- 4 共学について私たちのクラスですぐ実行できるようなことがあれば直ちにやろう。

・「29 世界のみなと」では、「三 外国人に対するエチケット」として以下の記述がある<sup>25</sup>。

神戸市民たる私たちは、外人に接する機会が非常に多い。外国人に対する態度として何も特別のものがあるわけではない。日本人に対する場合と同じく、明るい態度で真心をもつて接することが、何よりも大切なことであるのに変わりはないが、国籍が遠い、習慣が異なるに従つて、多少注意せねばならぬ点もある。

外国人に対するエチケットについて、少し書いてみましょう。(日本人同志でも守らなければならないことが多い。)(以下例、省略)

「4 外国人に対する態度」では、以下のように説く。

以上のこと(例示、省略)位は、日本人同志でも守らねばならぬ事であり、又中学生

表2「1」（『私たちの中学生生活』初版）の内容構成 筆者作成

	章立て	項目	授業形態	コラム・季節の話題
1	私たちのホームルーム	自己紹介・ホームルーム	自己紹介・相談・レクリエーション	
2	クラブ活動	クラブ活動・運動について（作文）	話し合い（小学校時代、中学校のクラブ決め）・作文	
3	よい礼儀作法	礼儀・おはよう	礼儀作法についての反省点の発表、項目チェック	天皇誕生日
4	自分一人くらいは	送別会	説話	メーデー・憲法記念日・子供の日・母の日
5	美しい教室	当番・草花・美しくするために・紙くず	美しい教室についての項目チェック	
6	働こう	働こう兄弟よ	詩の朗読、家の仕事や学校の掃除についての質問	
7	よいからだ	健康に関する問答	健康についての項目チェック・体格グラフ記入	赤十字 早言集
8	女だち	お母さんの風邪・けんか・よい友達とわるい友達	説話の感想、良い友達・悪い友達について考える	
9	勉強	加賀の千代・あなたの学校での勉強・あなたの家での勉強・教科書と参考書・勉強の後始末・ことわざ	勉強に関する質問項目チェック	
10	映画と娯楽	回る車輪・映画を見て・娯楽・自由な時間	映画に関する質問、悪い娯楽チェック、自由な時間に関する質問	
11	海へ山へ	詩「海へ」「山へ」	海水浴に関する質問、登山の計画立案	
12	たのしい夏休み	作文・日記	夏休みの計画立案、1日の計画立案	
13	ことばづかい	電車の会話・不良語について	説話を読み、誰の言葉が一番感じが良いか話し合う	としよりの日
14	磐梯山のふもと	野口英世の戯曲	戯曲を演者の立場で読み合い、演出者の立場で道具や服装を考える、自分の将来について書き話し合う	おひがん
15	新聞とラジオ	1関東大震災 2新聞と生活 3ラジオ	説話 新聞やラジオについて意見を述べる	
16	スポーツマンシップ	ニュージーランドのラグビーチーム	説話 説話に関する設問、自分の行動についての質問	運動会、みなと祭り
17	愛のこころ	「とれよ、与えよ」共同募金 兵庫・神戸募金額データ、募金配分、	説話・兵庫神戸募金額データ、募金配分、共同募金についての話し合い、私たちにできる社会奉仕	文化の日
18	読書	リンカーンの読書	読書についての設問、研究問題、説話 実行すべき事項	
19	つくしおとめ	尊敬する人人・つくしおとめ・	1尊敬する大人 尊敬する人についての設問 説話 宮沢賢治 2説話 つくしおとめ	3つのヒント
20	菩提樹の葉	1菩提樹の葉 2パンと銀貨 3かわいそうな女よ	説話 話し合い 詩 かわいそうな女への接し方 4医者 説話 設問	勤労感謝の日
21	交通道徳と防火	交通安全 1交通事故 2交通上の心得 火事を防ごう 1火災による損害2火災はどのような原因で起きているか3どのようにして火事を防ごうか 4もんだい 5消防活動はどのようにして行われているか	神戸市の交通事故統計 関連設問 神戸市の統計 消防活動	
22	なやみ	1私のなやみ 2 王様の耳 3ヘレン・ケラー	神戸市内中学生の悩み統計 1私のなやみ 2説話 王様の耳 設問 3説話ヘレン・ケラー	
23	お金のつかい方	小遣いの使い道	1市内中学生の年末年始小遣いの使い道 区別統計 2お金の使い方 設問 3説話 一本のろうそく感想 説話クリスマス 説話お正月	
24	ぼくの家	ぼくの家	家庭の事例から改善点の討論、2つのゲーム	成人の日
25	むずかしい学科	習字の時間・宿題・日課表・	説話に関する設問・説話・日課表作成	
26	はんせい	寝小便小僧	説話 自分の生活の改善すべき点についてのチェック表	
27	こじきと王様	こじきと王様 青い鳥	幸福についての話し合い	
28	共学	男女交際についての問い アメリカの男女共学	男女交際についての設問・アメリカの男女共学についての設問	
29	世界のみなど	神戸市歌楽譜・歌詞・神戸港の歴史・外国人の人数・外国人に対するエチケット・外国人からのお礼の手紙・ユネスコ・ボーイスカウト	外国人の人数の多い順番をつける・手紙の感想	世界は一つ
30	過ぎゆく日	詩、説話 蛍の光	「過ぎてきた日をしずかにふりかえってみよう。新しい学年へのおい将来への希望を、しずかに考えてみよう」	

ともなればよく分かっている事ばかりです。実行するかどうかによつて、その人の人格がきまるわけです。

外国人といえば、何か偉いもののように思つて、必要以上に卑屈になり、ペコペコするのは日本人の恥です。といつて相手によつては軽蔑したりするのも悪いことです。



外国人といつても同じ人間です。おたがいに真心をもつて接し、国際親善につとめ、平和な明るい世界を築いていこうではないか。

以上の例から言えることは、いずれも生徒の身近な生活課題に即した教材と設問が設定されていることである。すぐにクラスや家庭での実践に生かせる題材が選ばれ、生徒が自分の考えの提示や話し合い、データの読み取り等、すぐに取り組み、考えを深めることのできる内容となっている。テーマとしては民主主義社会の担い手としての自覚や、神戸市の置かれる状況の知的理解を高めることが企図されている内容であると考えられる。

初版各章の内容からは、①神戸市民としての意識を高める内容 ②生徒の日常や季節の経験に即した内容 ③生徒自身が自らを振り返り、今後の行動について考えさせる内容、という特徴を見いだすことができる。

授業形態の構成を数えてみると、「読物」（季節の話題含む）のべ66件、「詩」6件、生徒の「作文」2件、「日記」1件、「作業」「自己評価」（データの読み取り含む）49件、「脚本」1件、話しあいの問題等13件、レクリエーション1件となった。各種多様な授業形態には、その多くが2015（平成27）年学習指導要領改訂によって誕生した「特別の教科 道徳」においても適応しうる内容が含まれていると思われる。

#### 4 改訂版（1、2版）の出版

その後初版がホームルーム指導のテキストとして使用されたものの、学年ごとの分冊作成の要望がだされたことを受け、神戸市立中学校生活指導研修部での総会、幹事会での会合を経て、1953（昭和28）年には改訂第1版（『私たちの中学生活』全学年用）が作成され、翌1954年刊行された。編集の方針として、基本的には「昨年度の（初版、筆者註）趣旨に準じて作成」とし、単元設定にあたっては『私たちの中学生活』の30単元、それと多少重複するが、25年度の日常生活課程基準の約100単元、当時問題となった天野元文相の国民道徳実践要領に示された徳目、当時ようやく出版された東京お茶の水大学編『ホームルーム読本』の題目、さらにわれわれ現場教師が指導上重要と実感している題目等を素材としてかかげた」という<sup>26</sup>。ここで着目すべきは、いわゆる「天野勅語」と称された復古主義的な「国民道徳実践要領」に示された徳目もあわせて用いられていることである。「編集の方針」において「過去の徳目主義的な方法も頭から無視すべきではない。徳目の現代的な意味や、その具体化を慎重に考察してみる必要がある」<sup>27</sup>との指摘もあり、戦前回帰的なインドクトリネーションも含めて議論の対象とし内容にあげている点は注目される。また「われわれ現場教師」と自らを呼び、たびたび文書全体にも「われわれ」の文言が多用されているところに、現場教師としての自負がうかがえる。巻末に29名にのぼる原稿執筆、編集担当者名には全員中学校名が記されており、職階は不明までも現職中学校教員であることが判明した。

その後、1956（昭和31）年に、1957年版改定が決定された。理由として単元の数や内容

が多すぎること、ホームルームではなく他の教科で扱う方が効果的な単元があること等6点あげられている。

## 5 特設道徳への対応

その後1957年、「神戸市立中学校道徳教育研究委員会」が発足し、翌1958年2月に神戸市市立中学校の道徳教育実施要項試案が「指導課の助言、全市教職員の協力等を得」て完成した<sup>28</sup>。「われわれの会議がおわりに近づいた頃、文科省は4月から実施する道徳教育の要項を近く示すと発表した」という。4月の特設「道徳の時間」の文部省発表直前の2月に、神戸市市立中学校の道徳教育実施要項試案が完成したことになる。

この「神戸市立中学校道徳教育実施要項案」の内容を紹介する。

I 道徳教育に関する調査 神戸市立中学校39校の回答から見る調査結果が報告されている。

- ・72.8%が「道徳教育を強化する必要がある」と回答
- ・56.6%が全面主義道徳へ対し、「上記の理論は正しいが、実践しにくいからさらによくふうする必要がある」と回答
- ・63.7%が道徳教育の効果を上げ実践しやすくするために「具体的な指導計画を作成する必要がある」と回答
- ・『私たちの中学生生活』は「たいへん役にたつ」3.4%「かなり役に立つ」47.2%「あまり役に立たぬ」23.8%「無回答」25.6%という状態であった<sup>29</sup>。

II 指導目標 指導の内容を主として個人道徳に属するものと、社会道徳に属するものの二つに分類し、それぞれの人格の尊厳と社会の福祉の二の項でまとめ、各々を10項目ずつ挙げ、各項目に三つずつ具体的な目標をかかげた。指導目標は文章表現とし( )を設けて、端的に目標がつかめるようにした<sup>30</sup>。

III 指導の場と方法 従来神戸市の中学校では「私たちの中学生生活」を使ってホームルームを中心に、いわゆる生活指導を行ってきた。生活指導の立場は生徒たちの日常生活の経験に即して生活の場の問題を解決して、よりよい社会をつくり出していこうとするいわゆる問題解決の方法を中心とするものであった。今回のホームルーム指導を道徳教育の立場から強化しようというのは、単に社会への適応とか、社会生活の問題解決とかいう立場だけを考えるのではなく人間としてふむべき道を考え、道徳的に価値ある一定の目標を設定して「善悪のけじめ」ないし「より価値ある善」につく意識をもってそれぞれの社会の問題を解決し、あるいは生徒の行動をその方向へ選択させていこうという考え方を強化しようとするのである<sup>31</sup>。

IV 道徳教育とホームルーム 学校教育の全面において、道徳指導がなさねばならぬことはもとより当然なことであり、その線に沿って、本試案も作成されたわけであるが、道徳教育を集中的に指導できる場としては、H・Rが最も有効な場であることは理論

的にも、実際的にも肯定される場所である<sup>32</sup>。

V 道徳教育と学習指導 その教科のもつ特性を生かすことによって教師は学習指導を通してより高い人間形成をめざして努力することが肝要である。次に各教科の本質を明らかにしつつそれがどのように道徳教育と関連をもっているかを明らかにしたい<sup>33</sup>。

全体として「神戸市中学校道徳教育実施要項案」は、ホームルーム指導を学校教育全体の道徳教育の中核として設定し、各教科の道徳教育上の意義を論じる内容となっている。ホームルーム指導の強化の意図については、「人間としてふむべき道を考え、道徳的に価値ある一定の目標を設定して『善悪のけじめ』ないし『より価値ある善』につく意識をもってそれぞれの社会の問題を解決し、あるいは生徒の行動をその方向に選択させていこうという考え方を強化しようとする」と説明されている<sup>34</sup>。それでは主としてホームルームでの使用を企図して編集された「私たちの中学生生活」はどのような位置づけになると考えられたのであろうか。

## 6 「私たちの中学生生活」1958（昭和33）年改訂の趣旨

前述の「神戸市中学校道徳教育実施要項案」が作成されたことを受けて、「私たちの中学生生活」を「より使いやすく、より役立つものたらしめたい」として示された改訂の課題は以下ようになる<sup>35</sup>。

- 1 「神戸市中学校道徳教育実施要項案」に示された、指導目標や内容と、「私たちの中学生生活」との調整を考慮すること
- 2 特設「道徳」の時間が実施される場合、この「私たちの中学生生活」が使用される時間数が増加するとも考えられ、時間の増加に対応すること
- 3 過去六か年の実践を生かし、あくまで生徒の実態に密着したもの、したがって、それは国際港都にふさわしい郷土色豊かな「私たちの中学生生活」であること

特に指導方法については、以下のように主張されている<sup>36</sup>。

生徒の生活経験の直接的な指導は、自然な形で生徒の心情にいき入り、その魂をゆり動かし、指導の効果をあげる上にはたしかに有力な方法である。しかしその反面生徒の生活上の問題はその領域も狭く、その範囲だけに指導の素材を求めようとするならば、實際上その指導は、特にすぐれた教師でない限りきわめて偶発的となり、断片的になる傾向が強くなることは否定できない…そこで今回の改訂に当っては、生徒の生活経験の直接的な指導を基本にしながらも、さらに生徒の生活経験の間接的な指導の方法をあわせ考える立場をとった。しかし何れの方法をとる場合でも、問題の解決にあたっては、あくまでも生徒とともに社会の現実のなかになやみながら、ともによりよく育っていこうとする態度を忘れないことを強く意識した。

道徳的価値については以下のように述べられている。

「規律ある生活」とか、「自由と責任」とかというような徳目的の社会生活における必要性

やいみを解説したり、それを記憶させようとしたものではない。徳目を暗記したり、それを引き出すために例話を教えるだけでは、複雑な社会生活の中に生きる生き方を求めさせることはできないだろう。それだけでなく、1つの型からしか人生を見ることができなくなった場合、自己をとりまく複雑な人生に自信を失ったり、徳目に対して暖かな理解を失うことにさえなったりするおそれがある…こうした徳目主義の欠陥におちいることをさけるために、抽象的な主題を設定してもその内容には、生徒たちの生きた現実の生活の問題をとりあげることにつとめた…現実の生活は決して単純な善と悪との二者択一ではない。そこには善と善との対立があり、その中からよりよい善を自らの力で選び出す必要にせまられるのが普通である。「私たちの中学生生活」には、このような目で生徒の生きた現実の生活における価値の葛藤を通して、よりよい価値を選び出させるような内容を用意することにつとめた。また生徒の生活経験の直接指導をする場合も、単に生徒たちによりよい行動の仕方をしつけていくだけでなく、その行動のし方や生き方について、深く考えさせるような内容を多くすることに心がけた。

上記の内容から、教師の姿勢として「問題の解決にあたっては、あくまでも生徒とともに社会の現実のなかになやみながら、ともによりよく育っていこうとする態度を忘れない」こと、「生徒の生きた現実の生活における価値の葛藤を通して、よりよい価値を選び出させる」ことが重視されていることがうかがえる。現実の生活のなかでの葛藤から、「よりよい善」を自らの力で選び出すことを目指す方向性は、現行の「考え、議論する道徳」の目指す方向性と合致する部分があると考えられる。

上記のような意図によって改訂された「私たちの中学生生活」は単に「道徳」の時間のテキストとしてではなく、「生徒の全生活領域にまたがり、生徒たちの生活を直接間接的に指導するテキストとして編集」されたことが大きな特徴である。したがってホームルームの指導にも活用できるものであると考えられた。本書の学校生活上の位置づけは、上の概念図で説明された。概念図<sup>37</sup>。「図表のみでは意を尽くさないが、それらは『改訂の方針』ならびに『使用上の留意点』に譲ることとしたい」とされるものの、当該文書は見いだすことができなかった。

各学年の改訂内容の一覧表も添付されている。1年生用の構成内容は以下のように示さ

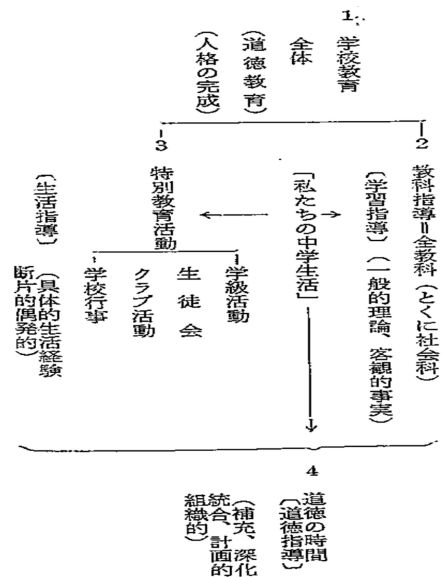


図1 「私たちの中学生生活」の位置づけ

れており、章立て等で改訂各版の比較をすることができる<sup>38</sup>。

表3 「私たちの中学生活」各改訂版（1年生）

	二十八年度 改訂	三十一年度 改訂	三十三年度 改訂
計十八主題 私たちの四季 A5版 一〇二項	1 私たちのホームルーム 2 生徒会とクラブ活動 3 美しい教室 4 けんか 5 よいからだ 6 海へ山へ 7 なつやすみ 8 磐梯山のふもと 9 ことばづかい 10 むずかしい学科 11 つくしおとめ 12 日曜日 13 菩提樹の葉 14 交通安全と防火 15 麦の奇蹟 16 男女共学 17 はんせい 18 明るい家庭 ※私たちの四季	1 私たちのホームルーム 2 生徒会とクラブ活動 3 美しい教室 4 けんか 5 よいからだ 6 なつやすみ 7 ことばづかい 8 むずかしい学科 9 尊敬する人 10 菩提樹の葉 11 はんせい 12 明るい家庭 ※私たちの四季	1 楽しいホームルーム 2 生徒会とクラブ活動 3 美しい教室 4 田中君のけが 5 友だち 6 余暇 7 自然に親しむ 8 中学生の夏休み 9 あいさつ 10 運動会 11 感謝の心 12 むずかしい学科 13 寒さくらべ 14 つくしと少女―尊敬する人 15 むだと活用 16 親の心配 17 規律のある生活 18 磐梯山のふもと―大きな 19 夢をもとう― 20 りんごの並み木 ※私たちの四季 一か年の思い出
計十二主題 私たちの四季 A5版 六三項			
計二十主題 私たちの四季 A5版 一一二頁			

網掛けおよび横線は筆者。網掛け部分は、各改訂時に追加された部分である。横線を引いた教材は、昭和31年度改訂時に削除されたものの、33年改訂時には復活した部分である。議論の末の改訂を経て、教材が削除・復活・追加されていることがうかがえる。第2次改訂版については筆者が現在実物を確認できておらず、本稿ではそれぞれの比較を行って内容について論じることはできなかった。

『私たちの中学生活』が1954年以降後どのように使用されたかを突き止めることはできていない。しかしながら、1965年刊行の中学生道徳意識調査報告において、「この度の調査結果も、さらに大はばに『私たちの中学生活』の中へ実質的な場面として調査結果を採録すること」がねらいとして示されており、継続刊行はなされていることがわかる<sup>39</sup>。

## まとめ

本稿で提示した「私たちの中学生生活」では、「特別の教科 道徳」で示されている教材の留意事項「生徒の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること。特に、生命の尊厳、社会参画、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと」<sup>40</sup>に共通する部分があると考えられる。特に「地域の実情」への配慮、「社会参画」、「伝統と文化、先人の伝記」といった分野に共通点が見いだせる。特に特設道徳設置後に改訂された改訂第3版では、「人間としての弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさについて、教師が生徒と共に考える姿勢を大切にすること」<sup>41</sup>と共通する観点が提示されているように思われる。

2015年・2017年の学習指導要領の改訂により、2018年度から小学校、2019年度から中学校で「特別の教科 道徳」が導入されたことは、戦後道徳教育史上の大きな転換点となったといえる。教科「道徳科」の導入意義、また課題については多くの議論があり、いまここでは詳述しない。筆者は2017年検定合格した小学校全学年教科書8社すべてに目を通した結果、現行小学校道徳科教科書叙述において「考え、議論する道徳」の理念のもと、掲載教材についての心情の読み取りや、議論等の活動による多面的な考えかたの育成が重視されており、子どもの主体的学びが重きをおかれていることは把握することができた。

しかしながら、各地域の生活や、子どもの日々の生活状況に関する内容については、全体の特徴としてどの地域、どの子どもでも適用される総花的内容であると考えられる。「各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育としては取り扱う機会が十分でない内容項目に関わる指導を補うことや、生徒や学校の実態等を踏まえて指導をより一層深めること、内容項目の相互の関連を捉え直したり発展させたりすることに留意すること」<sup>42</sup>が求められているが、各教員が各学校や地域の状況に合わせ、授業内で工夫することが求められているのが現状ではないだろうか<sup>43</sup>。

本稿で提示した「私たちの中学生生活」では、特に地域の特徴を生かした道徳授業実践や、子どもの日常生活の実情にそくした学びが提示されており、今後の道徳教育の充実に向けて参考にすべき点が含まれているのではないだろうか。

本稿では『私たちの中学生生活』各改訂版の学年ごとの内容の特徴や、1958年改訂版の詳細な内容と特徴については、資料の限界や紙幅の関係で十分に論じることができなかった。他稿に期したい。

<sup>1</sup> 山本敏郎・藤井啓之・高橋英児・福田敦志（2014）『新しい時代の生活指導』有斐閣アルマ、p17。

<sup>2</sup> 奥平康熙（2009）「1950年代後半の日本における道徳教育論とその転換（上）」『和光大学現代人間学部紀要』（2）。

- <sup>3</sup> たとえば板橋雅則（2007）「岩瀬六郎における「生活修身」の実践史的考察」『関東教育学会紀要』（34）。
- <sup>4</sup> 拙稿（2013）「昭和初期における地域型生活修身教育の理念－神戸市教育課『生活指導の修身教育』を題材として－」就実教育実践研究センター『就実教育実践研究』第6巻。
- <sup>5</sup> 拙稿（2014）「『神戸市教育課『生活指導の修身教育』にみる修身教育観－高等科部分を中心に－」『就実論叢』第43号。
- <sup>6</sup> 佟占新（2019）『戦後日本の道德教育の成立－修身科の廃止から「道德」の特設まで－』六花出版、第4章および第5章。
- <sup>7</sup> 前出 佟（2019）、pp.147-152。
- <sup>8</sup> 同上、p149-150。
- <sup>9</sup> 前出 奥平。
- <sup>10</sup> 小林万里子（2019）「『道德の時間』の授業論にみる教師の指導性」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第171号。
- <sup>11</sup> 梶井一暁（2015）「1950年代初期日本における道德教育の地域的展開－教育史演習授業使用史料の検討から－」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第160号。
- <sup>12</sup> 志村廣明（2006）「『道德』の時間の特設をめぐる教員の研究活動」『愛知県立芸術大学紀要』36号。
- <sup>13</sup> 橋本雅子・岩田貢（2017）「1960年代の道德の実践に関する検討－京都学芸大学附属京都中学校の例－」『龍谷紀要』第38巻第2号。
- <sup>14</sup> 文部科学省（2010）『生徒指導提要』p3。
- <sup>15</sup> 前出 1。pp.4-6。
- <sup>16</sup> 松下一世（2012）「『集団づくり』論の推移－人権の視点からの再考－」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』16（2）。
- <sup>17</sup> 早坂淳（2011）「日本の教育史における生徒指導と生活指導」『長野大学地域共生福祉論集』第5号。
- <sup>18</sup> 前出 山本・他、p6。
- <sup>19</sup> 日本生活指導学会、日本生活指導連盟、全国生活指導研究協議会らが研究活動を行っている。
- <sup>20</sup> 石田美清（2005）「学校における生徒指導と問題行動対策－昭和20・30年代の文部省通知と青少年問題各協議会答申の分析を通じて－」『上越教育大学研究紀要』第25巻第1号。
- <sup>21</sup> 神戸市立中学校生活指導研修部編刊、神戸市立中学校校長会発行（1959）『わたしたちの中学生活 指導資料書全学年用』改訂第一版「あとがき」。（神戸市文書館所蔵）
- <sup>22</sup> 神戸市立中学校生活指導研修部編刊、神戸市立中学校校長会発行（1953）『私たちの中学生的生活』pp.82-84。（京都大学図書館所蔵）
- <sup>23</sup> 同、pp.86-89。

- <sup>24</sup> 同、pp.115-116。
- <sup>25</sup> 同、pp.122-123。
- <sup>26</sup> 前出21、p.242。大学名は資料ママ。
- <sup>27</sup> 同上。
- <sup>28</sup> 神戸市立中学校道徳教育研究委員会『神戸市立中学校道徳教育実施要項案』（神戸市文書館所蔵）p1。刊行年月日記載はなく、「おわりに」は「昭和33年2月20日記す」とある。
- <sup>29</sup> 同上、p5。
- <sup>30</sup> 同上、p9。
- <sup>31</sup> 同上、p13。
- <sup>32</sup> 同上、p19。
- <sup>33</sup> 同上、p24。
- <sup>34</sup> 同上、p13。
- <sup>35</sup> 同上4pの指摘を要約した。
- <sup>36</sup> 神戸市立中学校生活指導研修部編刊、神戸市立中学校校長会発行（1959）『わたしたちの中学生生活指導資料書全学年用』改訂第一版pp.5-6。
- <sup>37</sup> 同上、p246。
- <sup>38</sup> 同上p249。
- <sup>39</sup> 神戸市立中学校生活指導研究部・神戸市立中学校特別活動研究部・神戸市立教育研究所（1965）『中学生はどう考えているか』p1。（神戸市文書館所蔵）。現在も神戸市道徳副読本として「わたしたちの中学生生活」が使用されている（「各自治体において作成した道徳に関する教材・指導資料等の例（平成25年9月現在）」[www.mext.go.jp/shingi/shiryo/\\_icsFiles/afieldfile](http://www.mext.go.jp/shingi/shiryo/_icsFiles/afieldfile)）ことは判明しているが、現在までの改訂・使用経緯やその後の特徴等は把握できていない。
- <sup>40</sup> 文部科学省「中学校学習指導要領」（2017）「第3章 特別の教科道徳 3 指導計画の作成と内容の取扱い」3。
- <sup>41</sup> 同上。
- <sup>42</sup> 同上。
- <sup>43</sup> 報道によれば、例えば社会科では「15年度の日本文教出版（大阪市）「小学社会3・4年上」は146ページ中104ページを姫路の内容が占め、姫路市教委が採択する大きな要因になったとみられる。同社は今回もほぼ半分で姫路を扱っている」（2019.8.17 付け神戸新聞「新教科書の採択争い熾烈 学習指導要領10年ぶり改定、各社が特色競う」）。広域採択制が導入された現在、教科書会社各社や各地域の教委が各教科に同様の対応ができるとは限らないだろう。